

安藤次男教授と及川正博教授のご定年にあたって

安藤次男教授は2009年3月末に定年を迎えられます。安藤先生は茨城県で生まれ、横浜の高校を卒業した後、京都大学法学部に入学され、27歳のときに同大学の法学研究科博士課程を途中で退学して立命館大学法学部助教授に就任、その後35歳で法学部教授に昇任されました。国際関係学部には創設1年後の1989年4月に着任され、爾来、20年間にわたり学部・研究科の発展に研究者として、また教育者として、さらには全学および学部の役職者としてご尽力いただきました。特に、学部創設10周年を迎えた1998年4月から3年間は学部長として類ないリーダーシップを発揮され、西園寺記念館から恒心館へのキャンパス移転をはじめ、今日の国際関係学部を築きあげるうえで重要な転機となる多くの改革推進にご貢献賜りました。

安藤先生は鋭さ、決断力、創造的な発想など切れ味のよい能力と視点を備えられた一見すると近づきたい存在ですが、実際にお話しをしてみると優しさ、慎重さ、歴史的な感覚をはじめ包容力ある雰囲気を持たれた素晴らしい先生です。

法学部時代を含めると安藤先生の立命館「生活」は38年間にも及びます。この間、安藤先生は研究面におかれては、「20世紀におけるアメリカ自由主義政治体制の論理と構造」をテーマに、一国的な視点を越えて国内政治と外交の両面からアメリカ政治の構造的特質を歴史的に解明されてきました。また、教育面においても「教育は研究とちがう独自の努力が必要なもの」という意見をお持ちで、学部および研究科で熱心に教育、指導に取り組み、安藤先生の教えを受けたOB、OGはいまや世界中でグローバル・リーダーとして活躍しています。

及川正博教授も2009年3月末に定年を迎えられます。及川先生は横浜市で生まれ、上智大学文学部英文学科を卒業後、米国ロサンゼルス・ロヨラ大学（現ロヨラ・メリーマウント大学）大学院英文研究科修士課程を修了された後、1981年4月に文学部助教授として立命館大学に着任され、同教授を経て1988年4月、国際関係学部創設と同時に本学部の教授に就任されました。この4月で満21年を迎える国際関係学部の歴史はまさに及川先生と共にあったと言えます。

及川先生は学部における英語科目の授業だけではなく、国際関係学という新しい学問の学びや研究において、どのような英語能力が求められるのかに関して語学や専門の教員と何度も議論を重ね、その成果を英語・国際研究や大学院におけるディベート研究など新しい科目の開講を通して実践されてきました。そうした及川先生の熱意溢れる授業に魅了された学生や院生にとっては通常の講義だけでは物足りないのでしょうか、恒心館4階の学習室では勉強熱心な学

生や院生から課外授業を督促されている及川先生をよく見かけます。

及川先生は研究面におかれては現代アメリカ演劇をテーマとし、中でもアーサー・ミラー関連の論文を数多く発表され、昨年8月にはこれまでの研究の集大成とも言える浩瀚な著作『アーサー・ミラー劇における倫理性—個人と社会の連帯性を巡って—』を出版されました。最終講義のなかで及川先生は、アーサー・ミラーの作品に強い影響を与えた1929年の大恐慌を彷彿させる100年に一度の金融危機の中で、定年を迎えるのは実に感慨深いと話されました。そのときのみじみとした及川先生の語り口は私の脳裏にしっかりと刻まれています。

この3月末で安藤先生も、及川先生も恒心館4階の研究室から去られることになりましたが、幸いお二人の先生は4月以降も特任教授として立命館大学に残られ、私たちはこれからもお二人の先生と一緒に教育や研究を続けることができます。お二人の先生におかれては休む間もなく、仕事が続くことは大変かもしれませんが、どうか未熟な私たちをひき続きご指導くださいますようお願い申し上げます。

末筆になりましたが、研究や教育に終わりはなくとも、定年は人生の一区切りのときでもあります。どうか健康にはくれぐれもご留意のうえ、新年度からも宜しく願い申し上げます。長い間、本当にありがとうございました。そして、すぐにまたキャンパスでお会いできることを心から楽しみにお待ちしております。

2009年3月

立命館大学国際関係学部長 高橋伸彰